

語文論叢の創刊に寄せて

荻原浅男

このたび千葉大学人文学部国語国文学会の発足とともに、その研究機関誌「語文論叢」が、会員各位の熱烈な学究心とuringわしき同窓愛の結晶として、めでたく誕生することになりました。まことに御同慶の至りに存じます。

顧みますと、本誌の誕生までには実に二十年の歴史の蓄積があったように思います。稲毛の文理学部時代の昭和二十六年七月に、千葉県下学校の国語科教員を会員とする千葉県国語国文学研究会が成立し、文理学部国文学教室に事務所を設け、機関誌「国語研究」を刊行しました。そのころは卒業生も少なく、在校生の研究意欲は未だ熟さず、この機関誌は全く国語教師のためのものでした。この誌はこの研究会が解散した三十一年に第五号を出して、以後廃刊になりましたが、収載の論文にはすぐれたものが多く、会員相互の学的錬磨と県下の国語教育に寄与するところ多大であったと思います。

その後、卒業生も多くなり、在学生との縦の連絡をはかるための親睦雑誌を出そうとする声が高まり、教官・卒業生・在学生を会員とする「国文季報」が三十四年十一月に創刊され、爾来四十六年までに十二号を刊行して来たのでした。この間に文理学部の改組で人文学部となり、卒業生諸賢及び在学生諸君の間から、研究のための学会と機関誌をもちたいという切実な要望が起り、私も教官も機熟したりとみて、欣然とこれに応えて、遂に今日の盛挙をみるに至ったのであります。思えば長い歴史の歩みでありました。

親睦誌の「国文季報」は、今後も既設のレールに乗って益々発展するでしょうが、新たに産声をあげたこの研究誌の「語文論叢」の前途には、きびしい試練が予想されます。研究誌という性格からみて、単に同窓の会員だけを対象としたものではなくなり、広く学会全般を対象として、各専門分野の批判にたえ、その学問水準を高めるのに寄与するという使命を担っているからであります。この使命を達成するには、会員諸賢のたゆまざる御研鑽と本誌に対する物心両面の御支援は必須であり、これを心から念願してやみません。

最後に本誌刊行の実務にお骨折り下された教官・卒業生の各位に心から御礼申し上げるとともに、本誌の限りなき発展を祈って、この蕪辞を終ります。